

看護学生の死生観形成に関する考察

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

自然に 生 と 死 の問題を考える機会が少ない現代社会において、学生たちは、どのような場面でこの問題を考えているのか、また、講義や臨地実習によりその価値観は変化するのかどうかを、看護学生・大学生を対象に調査を実施した。

第 1 章では、ケアの対象である人間を統合体としてとらえていくことの必要性と、科学的な専門知識の教育とともに、感じる力・考える力をつちかわせ、人間的な豊かさを育む教育も重要であるということ提起した。

第 2 章では、看護学生・大学生を対象にアンケート調査を実施したところ、死別経験をした学生は、死別経験をしていない学生に比べ、第 2 因子〈不死観 / 死後の世界〉が高い傾向がみられ、死別経験をとおして第 2 因子〈不死観 / 死後の世界〉が構築されていることがうかがえた。看護学生は死別経験の有無に限らず、第 5 因子〈人智を超えた生命〉の構築がされており、看護教育の効果が示唆された。

また、死 を一般的な事実や現象として、必然としてイメージしている学生は、大学生より看護学生に多く、「悲しい」「寂しい」などの感情表現をしている学生は、看護学生より大学生に多くみられた。そして、自分自身の死までイメージできている学生は看護学生・大学生ともほぼ同じであり、各年代で 生 と 死 の教育を意図的に行うことは、死生観形成に影響を与えることが期待できるということも示唆された。

第 3 章では、内科実習終了後の看護学生を対象に聞き取り調査を実施したところ、臨地実習や「患者の死」は、看護学生に「二人称の死」から「三人称の死」へ、ひいては、学生自身の死である「一人称の死」を考えるきっかけになると同時に、ふだんあまり意識していなかった 生 への意識化にもつながったと考えられる。

看護師にとって、「二人称の死」をきっかけに、一般的な事実として客観的にみることのできる「三人称の死」や、自己と他者との違いを再認識することのできる「一人称の死」と向き合うことで、「あなたの死」や「彼・彼女の死」も「私の死」と同様に大切にしていけるようになると思われる。

現代のように多様化する社会の中では、ひとりひとりが自己の存在の意味を考え、感じながら生きていくことは重要であり、子どもの頃から、その年齢に応じた自己の死生観を育んでいくことは必要不可欠なことである。しかし、人間が 生 に執着しすぎると 死 への不安や恐怖にとらわれてしまい、今を生きにくくする。ひとりひとりが、時間を超えた「いのち」の感覚をもち、自己存在の意味を考え価値を見出していくことができれば、それがすでに「死の準備教育」である。

医学的に 死 は「生命」の終わりであっても、ケアは「いのち」を支えるものでなければならない。そのためには、一人称・二人称・三人称の 生 と 死 の意味を円環させながら死生観を育んでいく看護教育やケアは必要であり、それと同時に、人間的な豊かさを育む教育が求められる。